

## ムクトップとパイプトップの具体的な違いについて その2

前回は、ムクトップとパイプトップの具体的な違いについて、実際の使用シーンに沿って、盛期におけるチョーチン両ダンゴの釣り方を解説した。

今回は、以下の 2 つのケースについて、ムクトップとパイプトップの具体的な違いを解説していく。

1. 厳寒期のチョーチンウドンセット
2. 渋い地合いでの底釣り

---

### 1. 厳寒期のチョーチンウドンセット

前号では、盛期におけるチョーチン両ダンゴの釣りにおいて、「止めて釣る釣りにはパイプトップ」、「動かして釣る釣りにはムクトップ」と解説した。今回は、「厳寒期のチョーチンウドンセット」という具体的な場面に即して解説していく。

寒さが厳しくなるにつれて、へら鮎とバラケエサの距離は遠くなる。12 月までは、ある程度トップに荷重をかけた「持たせ系」の釣りが可能だが、年明けには、バラケを持たせない「抜き系」の釣りへと変わっていく。こうなると、ハリスは長くなり、へら鮎の吸い込みも弱くなるため、トップの外径はどんどん細くなる。

以下の画像は、尽心作の **Type-J4** と **Type-J5** である。

このウキの特徴は、グラスソリッドトップの元径 0.6mm、先端径 0.2mm である点にある。特に先端径 0.2mm は、まさに髪の毛のような細さであり、長ハリス・吸い込みの弱いへら鮎のサワリやアタリを鋭敏に表現する。



## 画像 1 : 尽心作の Type-J4 (右側) と Type-J5 (左側)

Type-J4 と Type-J5 の違いは、ロングトップとショートトップの違いである。Type-J4 はロングトップで、0.6mm のガラスソリッドトップのストレート部分が長いため、中尺での厳寒期のチョーチンウドンセットに向いている。このストレート部分を使って、タナのどのあたりでバラケを抜くかを判断することができる。

このように、厳寒期においては、ガラスソリッドトップを使用するのは、へら鮎とバラケの距離感を適切に保ち、動きの鈍いへら鮎のサワリやアタリをいかに明確に表現するかが重要となるからである。

---

## 2. 渋い地合いでの底釣り

3 つ目の具体的な事例は、「渋い地合いでの底釣りにおけるパイプトップとムクトップの使い分け」である。

底釣りでは、トップの戻りを良く、かつ風によるシモリにも強いという理由からパイプトップを選択することが多い。

しかし、厳寒期や渋い地合いでは、少しでもへら鮎のサワリやアタリを引き出したい場合がある。そのような状況では、PC ムクやガラスムクトップといったムクトップを使用することも有効である。

底釣りでムクトップを使用する場合は、浮力があり、戻る力が強い「ツチノコ型ボディ」のウキをおすすめしたい。

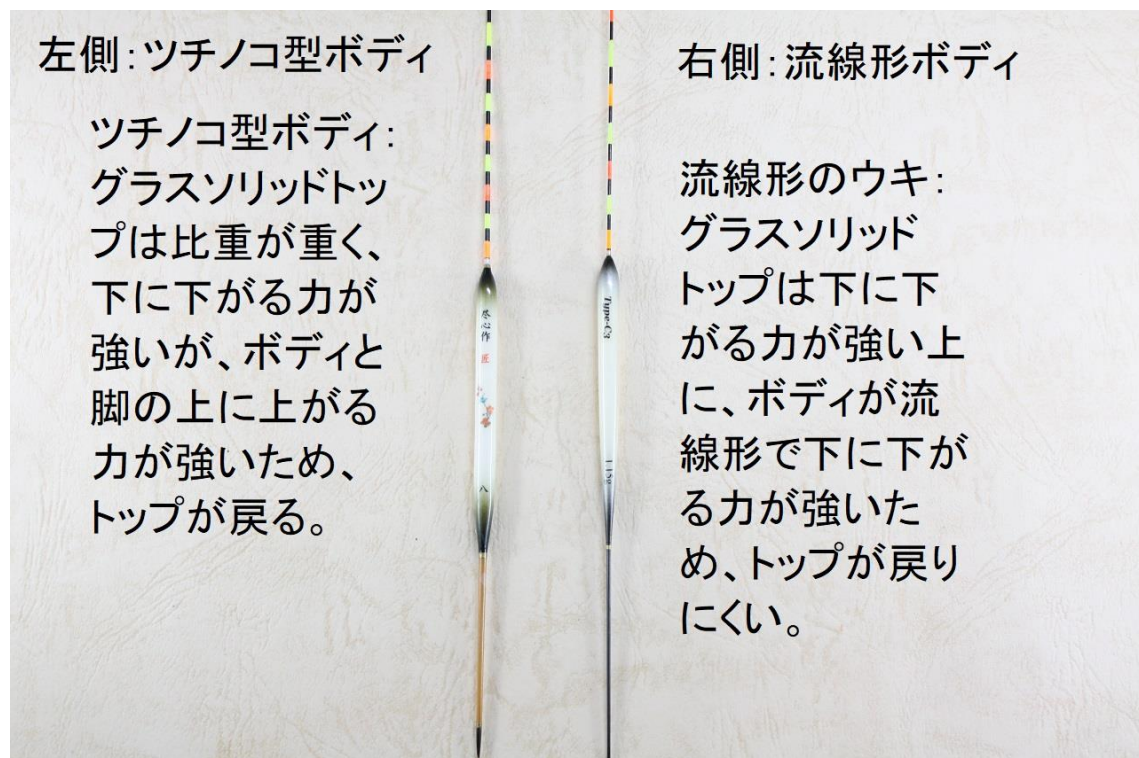


イラスト 1：流線形ボディとツチノコ型ボディの違い

**\*編集部の方へ、イラスト化をお願いします。**

流線形ボディとツチノコ型ボディでは、ボディの体積に違いがある。ツチノコ型ボディの方が体積が大きく、同じ径であっても浮力が強い。

また、ツチノコ型ボディは、水の抵抗の違いにより、上に上がろうとする力が強くなる。逆に、流線形ボディは水の抵抗が少ないため、なじみ込みは良いが、戻ろうとする力は弱い。

---

### 3. 総合性能としてのウキ

**ウキは、トップ・ボディ・足の3つのパーツの総合性能で決まる。**

「グラスムクトップは浮力がない」といった表現は、ウキ全体のバランスを考慮していないことによる誤解であると考えている。底釣りにおいて、比重が重いムクトップを使用する場合には、ボディ形状や足の素材にも気を配る必要がある。

具体的には、ボディ形状は戻る力の強い「ツチノコ型ボディ」、脚は比重の軽い「竹足」を採用することにより、例え比重の重いグラスソリッドトップであっても、そのデメリットをカバーすることができる。

---

次回は、「テーパートップとストレートトップの使い分け」について解説していく。